

# 「OT の実際 タイプ別にみる子どもと大人の間感とあそび」

ハビリテーション課

作業療法士 相澤 亜矢子

## 1. はじめに

OT 的な視点でのアプローチを 4 タイプ（鈍麻・過敏・ちょろちょろ・こだわり）に分け、実際の評価とあそび・関わり方を紹介する。

## 2. 感覚-運動遊び

1 歳半くらいまでは、「筋肉・関節から入る感覚（以下、固有覚）」「身体の傾きを感じる感覚（以下、前庭覚）」「触れる感覚（以下、触覚）」といった感覚刺激を純粋に楽しむ時期がある。その時期を脱しても感覚の受け取りに偏りがある児・者に対しての OT 的評価とあそび、関わりを以下に記す。

## 3. 鈍麻タイプ

「探求」と「気づかない」の 2 通りある。

「探求」は爪先立ちやぐるぐる回る、ベタベタくつつくという行動となり、感覚を求めて自分と周囲の環境に気付こうとする。「気づかない」は感覚に気付かない為、ぶつかっても平気・力加減が難しくなる。これらの児には感覚刺激が強く入る遊び（感覚統合遊具・感触あそび等）を提供し、気づきを増やしていくことが必要である。

## 4. 過敏タイプ（触覚過敏について紹介）

触覚過敏の改善は難しい為、セラピストとの信頼関係を築き、安心感を作ることが大切である。触る際のポイントは以下の通りである。

- ①自ら触れる
- ②人肌を用いる
- ③関節的でも遊べた経験を積むこと

注意点は強要しない事であり、苦手な事へ向き合えたことを賞賛し成功体験を積み、自信へ繋げる。また、全身に過敏がある児に触れる時は、防衛的に叩く・突き飛ばす行動がみられることもある為、名前を呼び正面から触ることが大切である。

## 5. ちょろちょろタイプ

多動は、感覚鈍麻や過敏に加え、視覚の転導性が影響する。以下のあそびのポイントが重要である。

- ①全身を使う遊びの提供
- ②注目できる目標を作る
- ③覚醒のコントロール

## 6. こだわりタイプ

新しいことの予測・イメージの難しさが影響する。取り組める活動を増やし、活動の幅を広げることが必要である。ポイントは以下の通り。

- ①信頼関係の構築
- ②変化の予告
- ③変化は 1 つまで
- ④成功体験を積むこと

## 7. まとめ

感覚は、運動・あそび・話す・人の気持ちを考える等の発達を促す為の基礎となる。あそびを使って感覚の偏りへアプローチすることが、重要である。

## 参考文献

- ・ Anita C. Bundy 他編著 土田玲子・小西紀一監訳 岩永竜一郎・太田篤志他共訳 感覚統合とその実践 第 2 版 共同医書出版社
- ・ 土田玲子監修 感覚統合 Q&A 改訂第 2 版 共同医書出版社
- ・ 田中康雄 発達障害の児の心と行動がわかる本 西東社